

コロナ禍の今だからこそ一致団結を
学習院父母会長として、
広く情報収集しながら
子どもたちの学校生活をサポートしたい

Interview

大野 泰弘
(学習院父母会長)



学習院での財産は“人間関係”

私は初等科から学習院に入学しました。5歳上の姉も初等科に通っており、両親としては一緒に通学できれば安心だったのでしょう。そこから大学まで学習院。中学・高校・大学とスポーツに熱中していた私にいつも温かく、時には厳しく接してくださった先生方のおかげで成長できたと思っています。特に初等科在学当時、学習院長をされていた安倍能成先生が「正直であれ」とおっしゃっていました。今でも大切に心に刻んでいる言葉です。

大学時代はアメリカンフットボール部に所属していました。選手同士が激しくぶつかり合う力強さの中にも実は綿密に計算された戦術があり、その奥深さに魅力を感じて練習に明け暮れたものです。入部を決めたのは懇意にしていた先輩とのご縁でしたが、今思えば学習院で手にした一番の財産は「良い人間関係を築けた」ことかもしれません。先生、仲間、環境に恵まれたすばらしい経験から、私の4人の子どもたちも幼稚園から大学まで学習院でお世話になりました。

子どもたちに安全・安心な学校生活を

子どもたちが長く学習院に在籍していることから、父母会には約20年間携わってきました。令和元(2019)年に父母会長となり、幼稚園から大学までの幹事と連携

を取りつつ各学校の支援に尽力しています。今年は新型コロナウイルスの感染拡大が教育現場を直撃し、過去に例を見ない非常時の対応を余儀なくされています。緊急事態宣言に伴う休校をはじめ、分散登校やオンラインによる遠隔授業など、私も末娘を大学に通わせる親の立場として、親御さんの不安はよくわかります。そうした中、大学・女子大学においていち早く「学生支援給付金」を全学生に支給した学習院は英断だったのではないのでしょうか。学生本人はもちろん、親御さんにとっても、遠隔授業に向け環境整備を進める心強い一助になったと思います。コロナ禍の終息が不透明な今、社会・経済情勢の悪化は今後の学校経営にも影響を及ぼすものと考えられます。子どもたちの安全・安心な学校生活をサポートするためには多くの方々の継続的な支援が必要不可欠です。私も父母会長として幅広く情報収集しながら、この未曾有の状況を御父母、先生方を始め学校関係者の皆様と共に乗り越えていきたいと思っています。



Profile 大野 泰弘 (おおの やすひろ)

初等科から大学までを学習院で過ごし、昭和56(1981)年学習院大学経済学部経営学科卒業。その後、自営業のかたわら父母会に携わり、令和元(2019)年5月より学習院父母会長に就任。大学時代はアメリカンフットボール部副主将。

学習院の名情景

第7回 西1号館

キャンパスに遺る数々の馴染み深い場所をご紹介します。このシリーズ。第7回は、国の登録有形文化財にもなっている「西1号館」です。その設計には、世界に目を向けた教育を支えるべく、当時の先端を行く建築知識や技術が惜しみにく注がれました。



どっしりとした風格を感じさせる西1号館には、多様な建築様式が美しく融合している

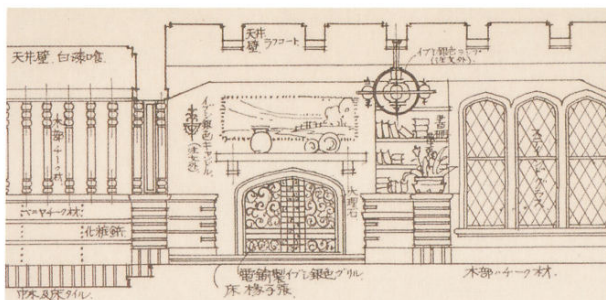
目白キャンパスの正門を入り南西方向に進むと、やがて大きな櫟の樹の向こうに、赤茶色のタイルに覆われた重厚なたたずまいを持つ西1号館が姿を現します。昭和5(1930)年、英国の名門イトン校をモデルに中等科教場として建てられたネオ・ゴシック様式の校舎で、宮内省内匠(たくみ)寮により設計されました。内匠寮は、明治18(1885)年から昭和20(1945)年まで60年もの間、日本の洋館建築をリードした一流の建築家集団。多くの宮廷建築を手がけながら、皇室との関係が深い学習院の校舎整備にも腕を振るい、南1号館や東別館などの設計も行なっています。

担当技師は、アール・デコ建築の世界的傑作と名高い朝香宮邸(現・東京都庭園美術館)や、李王家邸(現・赤坂プリンスクラシックハウス)なども手がけた権藤要吉(明治28《1895》～昭和45《1970》年)です。権藤は大正14(1925)年、欧米に派遣されて最先端の建築知識・技術を幅広く研究。その成果は西1号館の設計にも存分に生かされました。中でも力を注いだのがチューダー様式を取り入れたサロン風の英語会話教室です。マントルピースを模したストーブ置き場やステンドグラス入りの窓、造り付けの革張りベンチなど、

中学校舎としては別格の豪華な仕様・設備が特徴です。当時の学習院の重要な教育目標のひとつは優れた外交官の養成。この教室の設計には、日本の未来を担う若者に国際外交の舞台と同じ空気を肌で学ばせたいという意図が込められていました。そのほか、形状の異なるアーチを前後に配した玄関ポーチや、フランク・ロイド・ライトも好んだスクラッチタイルを用いた外壁、

アール・デコ様式の円窓など、時代を映す“建築作品”としての見どころを建物各所に有しています。

関東大震災の教訓から極めて堅牢に造られた西1号館は、第二次世界大戦時の空襲も免れ、現在も大学の授業に活用されています。その間、改修の過程で建物内外にさまざまな変更が加えられましたが、近年、権藤の手書きによる多くの設計図面の存在が明らかになりました。失われてしまった竣工時のオリジナルの意匠や実現しなかったアイデアまで緻密に書き込まれた図面は、時空を超えたタイムカプセルとして、先人の卓越した技術や情熱を今に伝えています。



権藤要吉により細部まで丁寧に書き込まれた英語会話教室西側面の設計図と現状の姿



取材協力:学習院大学史料館 学芸員 富田ゆり